



# 筑紫女学園大学リポジット

Agatha Christie著『Murder in Mesopotamia』における考古学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/513">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/513</a>

# Agatha Christie著 『Murder in Mesopotamia』 における考古学

大 津 忠 彦

## Archaeology in *Murder in Mesopotamia* by Agatha Christie

Tadahiko OHTSU

### はじめに

英国イラク考古学研究所（The British Institute for the Study of Iraq）発行の考古学専門誌（定期刊行物）*Iraq*は、その第38巻第1号（1976年）巻頭に、アガサ・クリスティ（Agatha Christie Mallowan, 1890年9月15日～1976年1月12日）の“obituary”を掲載した<sup>(1)</sup>。それは、女史の肖像写真を1頁分全体に配し、追悼文を別頁に設けるという同誌としては破格の掲載形態であった。「イギリスの女流作家。探偵ボアロ・女探偵ミス＝マーブルを登場させて、多数の推理小説を発表<sup>(2)</sup>」したことで不動の世界的名声を得たアガサ・クリスティは、同時に、イギリスの西アジア（中東）考古学界においてかくも追悼さるべき人物のひとりであった。作品群のなかには西アジア（中東）を舞台とした、しかも考古学遺跡を採りあげた傑作も少なくなく、「クリスティの夫、マックス・マローワンがオリエント専門の考古学者であり、また彼女自身、メソポタミヤ地方の人々、風土をこよなく愛していたからだ」とも論じられている<sup>(3)</sup>。たしかに、夫君マックス・マローワン（Max Edgar Lucien Mallowan, 1904～1978年）は英国を代表する西アジア考古学者のひとりであり、幾多の発掘調査・研究のうちとりわけニムルド遺跡（イラク）に関しては、その業績<sup>(4)</sup>により荣誉称号“Sir”が与えられたほどである。

この「女流作家」と「オリエント専門の考古学者」との協働具合は、各々の自叙伝<sup>(5)</sup>が活写するところながら、各自がその成果を具現化した「推理小説」と、いわゆる「考古学調査研究報告書」においてもまた相互扶助的にうかがわれる。例えばアガサ・クリスティの推理小説作品のひとつには、その冒頭に「キャンベル・トンプソン博士夫妻に捧ぐ」（福島正実訳『エッジウェア卿の死』、クリスティ文庫7、早川書房、2004年）（"To Dr. and Mrs. Campbell Thompson", *Lord Edgware Dies*, 1933）との「献辞」が見られる。そして、これに対応して「考古学調査研究報告書」にはつぎのような一節が見出される：

“During this season I was accompanied by my wife as before, and as colleague and assistant by Mr. M. E. L. Mallowan, who was joined by his wife and greatly helped by her in the drawing of the pottery.” (Thompson, R. C. & Mallowan M. E. L., *The British Museum Excavations at Nineveh, 1931-32, Annals of Archaeology and Anthropology*, vol. 20, 1933,

Liverpool, pp.71-186.)

すなわち、1930年9月にマローワンと結婚（再婚）したアガサ・クリスティはトンプソン指揮のニネヴェ遺跡（イラク）調査隊に加わり、遺跡出土土器資料の図面化（＝実測図作成）を行ったことが明記されている。爾後、マローワンとアガサ・クリスティは、ほとんど常に遺跡調査現場において共に有り、後者も遺跡の考古学調査活動に従事した。たとえば、アルパチャ遺跡（イラク、ハラフ文化の標準遺跡）の調査報告書で、マローワンは次のように記している（下線は引用者による）：

The personnel of the expedition consisted of Mr. M. E. L. Mallowan, M.A., F.S.A., Director, and Mr. J. Cruikshank Rose, A.R.I.B.A., architect, who was entirely responsible for the planning and surveying, the drawing of the objects, and shared in all the field-work. Mr. Rose also wrote a part of Chapter 2 on the construction of the tholoi : in working out our results I was fortunate in having his close co-operation and advice, but I must accept the responsibility for the written account. My wife undertook the developing and printing of the photographs, and helped us in the difficult task of reconstructing the pottery. To the loyal co-operation of my colleagues the expedition owes a large measure of its success. (Introduction by M. E. L. M., 1934, in Excavations at Tall Arpachiyah, 1933 by M. E. L. Mallowan and J. Cruikshank Rose, *Iraq*, vol. 2, pp.1-178, 1935)

これは、当然ながら、マローワンの自叙伝（註5、既出）における言及処に符合する（下線は引用者による）：

the dig was published in the second volume of *Iraq* within six months of its completion, and that was something of a feat. The staff consisted of no more than three persons, my wife Agatha, who had since Nineveh joined me in every single expedition to the East (Mallowan 1977, p. 86)

なお、アガサ・クリスティ作品『Murder in Mesopotamia』（1934）における「献辞」"To M. E. L. M. Arpachiyah, 1933."にある“M. E. L. M.”はマローワン（M. E. L. Mallowan）、そして“Arpachiyah”はTall Arpachiyah遺跡（イラク）の意である。

マローワンは西アジア（おもにイラクおよびシリア）における発掘調査やそれに先立つ分布調査活動に妻アガサ・クリスティを伴い、それらの現場では作業の一端を担わせた。それは「出土土器修復（復元）」や「写真撮影」などであったらしい。そしてこのことをマローワンは必ず「考古学調査研究報告書」中に、謝意を込めて明記している：

・“my wife also was present throughout, and assisted in the mending of the pottery and in the photography.” (Mallowan, M. E. L., 1936, The Excavations at Tall Chagar Bazar, and an Archaeological Survey of the Habur Region, 1934-5, *Iraq* Vol.3, No.1)

- ・ “Finally I have to thank my wife, who was again largely responsible for the mending of the pottery and for the photography undertaken in the field, having now shared with me the labours of three consecutive expeditions between Tigris and Euphrates.”

(Mallowan, M. E. L., 1937, The Excavations at Tall Chagar Bazar and an Archaeological Survey of the Habur Region. Second Campaign, 1936, *Iraq* Vol.4, No.2)

- ・ “My wife was with me during every campaign, took all the photographs in the field, and in every way has been an invaluable helpmate in my labours.”

(Mallowan, M. E. L. 1947, Excavations at Brak and Chagar Bazar, *Iraq* Vol.9)

また、先述の*Iraq*所収 “obituary” は、アガサ・クリスティが長年にわたり夫君マローワンの多くの考古学調査遺跡現場に関わった具合を強調しているようである：

As the wife of our former Director, Chairman and now President, Sir Max Mallowan, whom she first met at the Ur Excavations in 1930, her life has in no small measure encouraged the major projects of the School since its inauguration in 1932. For more than forty years, on many expeditions, at Chagar Bazar, Brak and Arpachiyah, on the Balikh area survey and annually at Nimrud, she not only accompanied her husband but also actively shared in the labours of the various expeditions and enjoyed the rigours of camp life. (註1)

したがって、マローワンによるニムルド遺跡（イラク）調査研究の集大成 “*Nimrud and its remains*” (註4) が記す下記「献辞」こそはむべなるかな、である：

I dedicate this book to my wife, Agatha Christie Mallowan, who shared with me in the joys and trials of excavating Nimrud and lightened our labours through her imagination, her skill, and her kindness

## I. アガサ・クリスティ作品『Murder in Mesopotamia』の選定

アガサ・クリスティは、長きにわたり夫君と共に西アジア古代遺跡の発掘調査に具体的役割を担って関わり、結果、作家活動として彼の地の遺跡・考古学にまつわる佳作を成すこととなった。アガサ・クリスティが遺跡発掘調査現場作業に、調査隊構成員のひとりとして確かに参加があったことは、先述のごとく、マローワンによる「考古学調査研究報告書」中に極めて簡素ながらも確かな言及がある。それは、「学術調査報文」として定型化しているともいえる、必要にしてかつ最小限に留まる事実報告にすぎない。しかしこれを端緒に、推理小説作家がその体験を如何様に作品化しているかに視座をかえれば西アジア考古学史のみならず、限られた世界での事項とはいえ、濃密かつ説得力ある異文化接触の様態が少なからず垣間見られるように思われる。私事ながら、筆者は1978年3月4日から1979年2月10日まで、および1979年4月14日から1979年10月19日までの期間、北イラクにおいて古代遺跡の発掘調査に従事した折の経験を回想しつつ、「学術調査報文」以

外のアガサ・クリスティによるいわゆる「ノンフィクション作品」<sup>(6)</sup>や考古学遺跡を採りあげた傑作に親しむ時、改めてその卓越した臨場性・迫真性には首肯せざるを得ない。このたびは、そのような傑作のひとつ『Murder in Mesopotamia』を西アジア考古学の観点から読み解き、この作品の有するリアリティの源泉を確認してみたい。なお、参照書籍としては“Agatha Christie Signature Edition” (2001, Harper) 版を利用した (■は引用文の意、文末は所収頁を表わす)。

## II. 『Murder in Mesopotamia』とその臨場性

### i. 作品に設定された時代とその舞台

『Murder in Mesopotamia』の発表年(初出)は1936年。したがってそれまでに、アガサ・クリスティの西アジアにおける考古学調査現場体験は、年譜等に照合すれば、マローワンに相伴うUr遺跡(イラク、1930年)、Nineveh遺跡(イラク、1931、1932年)、Arpachiyah遺跡(イラク、1933年)、Chagar Bazar遺跡(シリア、1935、1936年)等における発掘調査や関連する「一般調査」と考えられ、したがって、それらが作品に反映されたこととなる。いずれの遺跡もいわゆるメソポタミア北部に位置し、特に先史考古学研究上、不可避の重要性を含み持つ。「発表年1936年」を考慮すれば、物語の時代設定はどのようになっているであろうか?これについては、物語中下記選定の箇所を判断材料に、つぎのように総合的に考えることができるのではなかろうか:

■‘When I was a girl of twenty I married. A young man in one of our State departments. It was in 1918.’ (p.91) ⇒ Mrs Leidner<sup>(7)</sup>は1918年の20年前、すなわち1898年生まれ。

■She wasn’t a young woman. Midway between thirty and forty, I should say. (p.45) ⇒ 1898年生まれのMrs Leidnerが「30歳と40歳のあいだ」と見做されたのであれば、物語の当時は1898+30、および1898+40から、「1928年から1938年」頃ということになる。

また、Mrs Leidnerが結婚後すぐに「死別」した最初の夫に、もし会ったら当人と解るかについて、

■‘I don’t even know that. It’s over fifteen years ago. I mightn’t recognize his face.’ (p.97)

および、Mrs Leidnerの現夫 Dr Leidner<sup>(8)</sup>があらためて告げられる事実

■Some fifteen years ago your wife lived with this man for a few months. (p.161)

すなわち、Mrs Leidnerの結婚後の経過年数から、1918+15=1933年ということになる。この年代値は、先述の「1928年から1938年」頃と矛盾しない。

物語の設定年代を1933年頃とみなせば、アガサ・クリスティは前述のイラン、シリアにおける自らの初めての遺跡調査体験を、それからあまり日を置かずして物語創作に生かし、『Murder in Mesopotamia』を構成したこととなる。遺跡の考古学調査体験は、たとえそれが西アジア考古学従事者にとっては考古学的決まり事からの必要で陳腐な活動工程に過ぎなかったにせよ、門外漢のアガサ・クリスティにとってはそれらすべてが初めての新鮮で、強い興味の対象になったであらうことは、自叙伝等から窺い知れるこの作家の性情からじゅうぶんに考えられ得る。したがって、それらが作品中に描述されると、これまたこの作家独特の妙技から、読者に十分な迫真性を提供する

こととなる。時によっては、あまりにも微に入りかつ専門的であるがために意味不詳となる場合もあるようである。たとえば邦訳本中には奇妙な「考古学専門用語」化が見いだされるのは、ある意味致し方ないのかもしれない。

物語の舞台は、古代遺跡Tell Yarimjah。その所在地は大略下記のように設定されている：

■ And he explained how this expedition was excavating the site of a big Assyrian city something like Nineveh. The expedition house was not actually very far from Hassanieh, (p.21)

⇒アッシリア期の都市遺跡Tell Yarimjahの調査隊宿舎はHassaniehに在る。Hassaniehへは、バグダード (Baghdad) から車中泊1日でキルクーク (Kirkuk) に至り、そこから車で約4時間の旅程。Tell Yarimjah遺跡はHassaniehの郊外、車で30分ほど行ったところに位置する。

■ A path led between barley fields and then through some flowering fruit trees. Finally we came to the edge of the Tigris. Immediately on our left was the Tell with the workmen singing in their queer monotonous chant. (p.77)

⇒調査隊宿舎から麦畑、果樹園を抜けて行くとティグリス河岸に至り、すぐ左手に発掘調査中のTell Yarimjah遺跡が見られる。



図1 キルクーク周辺の遺跡分布 (□は現代都市、■は遺跡を示す)<sup>(9)</sup>

「Tell Yarimjah」および「Hassanieh」は、それぞれいずれも架空の遺跡名、地名ながら、キルクーク周辺域は丘状の遺跡 (tell, tall) が数多く分布し (図1)、Tell Yarimjah遺跡の立地としては、自然で現実性がある。

筆者は1978～79年の在北イラク遺跡調査経験 (図1の「ディヤラ川」と記された地域) から、物語中Tell Yarimjah遺跡へ至る旅程の状況描写のとくにひとつを、この作家ならではと、その迫真性に首肯せざるを得ない：

■ Jolting! I wonder the whole contraption didn't fall to pieces! And nothing like a road—just a sort of track all ruts and holes. (p.32)

■ ‘Track’s in pretty good condition,’ he shouted just after we had been thrown up in our seats till we nearly touched the roof. (p.32)

■ ‘You should come along here after it’s rained! The skids are glorious. Most of the time one’s

going sideways.’ (p.33)

すなわち車にとって極端に悪路の様である。粒子の細かい粘土質土壌からなる泥路であろう。雨が降れば泥濘、さらに殆ど液状と化せば、そのあまりの滑りやすさから、車の制御はほとんど不可能となる。しかし、乾きあがり硬化すれば、轍の凹凸も加わって、また難儀させられるのである。これは、基本的には乾燥地メソポタミアながら、時として凄まじい冬場の降雨<sup>(10)</sup>と春以降の乾期双方から体験理解できることである。先に引用 (p.32-33) の箇所は、Tell Yarimjah遺跡調査初参加者<sup>(11)</sup>の言動として、当該地の自然風土の特徴を巧みに著している。なぜならば、下記の会話場面<sup>(12)</sup>から判断し、この物語は2月27日から3週間後、すなわち3月20日前後の出来事として進行しているので、運転者Colemanはメソポタミアの雨季を当然経験済みと考えられるのである：

■ Ask any questions you please of me,’ said Father Lavigny gravely.

‘This is your first season out here?’

‘Yes.’

‘And you arrived—when?’

‘Three weeks ago almost to a day. That is, on the 27th of February.’ (p.129)

また、次の会話場面<sup>(13)</sup>に登場する花 (ラナンキュラス) の開花時期が冬から春にかけてであることから、想定し得る「3月20日前後」という設定時期は矛盾しない：

■ I saw then that he was holding a little bunch of scarlet ranunculus in his hand. They were pretty little flowers and they grew wild on the sides of the Tell. Mrs. Leidner had been fond of them.

He blushed and got rather red as he said: ‘One can’t get any flowers or things in Hassanieh. Seemed rather rotten not to have any flowers for the grave. I thought I’d just nip in here and put a little posy in that little pot thing she always had flowers in on her table. Sort of show she wasn’t forgotten—eh? A bit asinine, I know, but—well—I mean to say.’ (p. 268)

## ii. Tell Yarimjah遺跡における宮殿遺構の検出

物語舞台であるTell Yarimjahの遺跡形態は、“a big mound by the river bank” (p.41) すなわち川堤のそばに位置する、西アジア特有の「遺丘 (テル)」。発掘調査は“the great court, and there were some chambers here and an upper storey and various other rooms that opened off the central court” (p.68) から成る「宮殿 “palace”」址遺構がその対象となっている。物語りでは、初めてここを訪れるAmy Leatheranに、しかし、アガサ・クリスティは期待外れの冷めた感想ならびに素朴な疑問を抱かせしめる。このことは、マローワンの地道な (素人には意味不詳な) 考古学調査現場におけるアガサ・クリスティの実際の現地経験、素朴な感想がそのまま反映されているようにも思われ、かえって読者に物語の現実性を覚えさせる：

■ But would you believe it, there was nothing to see but mud! Dirty mud walls about two feet high—and that’s all there was to it. Mr. Carey took me here and there telling me things—how

this was the great court, and there were some chambers here and an upper storey and various other rooms that opened off the central court. And all I thought was, 'But how does he know?' though, of course, I was too polite to say so. I can tell you it was a disappointment! The whole excavation looked like nothing but mud to me—no marble or gold or anything handsome—my aunt's house in Cricklewood would have made a much more imposing ruin! (p.68)

Tell Yarimjah遺跡が設定されたメソポタミア北部において上記のような建築址を発掘する場合、それは構造物を埋め尽くした泥土と、建材である泥煉瓦や石材から成る壁体とを分離する作業となる。日干しの泥煉瓦 (= 'Libn') と、基本的には同質の埋土とを峻別するには、経験から体得すべき特殊な技術能力を必要とする。したがって発掘現場では、泥煉瓦製建築遺構 (壁体) の検出にあつては、じつに地道な専門職人技的作業の継続となる：

■ It's my opinion that the men who were digging just hacked out walls wherever they wanted them. That's what it looked like anyway. Mr. Carey explained to me that you could feel the difference at once with a pick, and he tried to show me—but I never saw. When the man said 'Libn' —mud-brick—it was just ordinary dirt and mud as far as I could see. (p.226)

### iii. Tell Yarimjah遺跡における土器資料

考古学調査研究における土器資料の重要性はあらためて言うまでもない。年代判定の証跡と成り得る土器資料すなわち考古学的「一級資料<sup>(14)</sup>」を、いかに信頼性高く集成できるか否か、これこそが発掘調査研究の成否を左右する。西アジア考古学調査では遺構残存状況が良好な場合、得てして遺構検出を最優先しがちになるが、これは真に学術的調査の基本に照らして慎むべきとされる。しかしながら、実情はこんにちでさえ認識不足の場合が少なくない。この点において、マローワン主導による前出Arpachiyah遺跡やChagar Bazar遺跡等の調査研究姿勢およびその成果は、今なお信頼し得る内容である。Tell Yarimjah遺跡調査風景には、このことを示唆する一連の描述がいくつみられる。ひとつは、遺跡を構成する土層の堆積状況に沿って忠実に出土資料 (主に土器) を採集する、すなわち編年的目的から特定箇所を掘り下げるいわゆる「深掘り (deep sounding)」(物語作品中では“deep cut”と表現されている) についての描述である<sup>(15)</sup>：

■ 'That's what they call the deep cut,' I explained. 'They don't find much there, nothing but rubbishy broken pottery, but Dr Leidner always says it's very interesting, so I suppose it must be. (p.231)'

■ It was a little difficult to get down to them as there was only a narrow path or stair and basket-boys were going up and down it constantly, and they always seemed to be as blind as bats and never to think of getting out of the way. (p.231)

素人眼には何の変哲もない土器片 (nothing but rubbishy broken pottery) しか出土しないにもかかわらず、ここにこそ非常に考古学的関心を示すDr Leidnerの姿勢、あるいは発掘現場に穿たれ



た深い立坑の描述はマローワン自身や、あるいはアガサ・クリスティが最初に体験したであろうUr遺跡の調査風景を想起させる。

いまひとつは遺跡で発掘された土器資料の宿舎における整理作業風景の描写が、物語中にきわめて細かく丁寧、そして頻繁に見いだされることである：

■ We went up to the roof together. Mrs. Mercado was there, sitting on the parapet, and Dr Leidner was bending over looking at a lot of stones and broken pottery that were laid in rows. There were big things he called querns, and pestles and celts and stone axes, and more broken bits of pottery with queer patterns on them than I've ever seen all at once. (pp.56-57)

⇒宿舎の屋上（当該地域では普段の生活場所）には、付着した泥土を洗い落とされた出土資料が発掘区別に広げられる。これは水洗いで濡れた出土資料を乾かすためではあるが、調査従事者はこの段階で出土品の全体傾向をはじめ明瞭に俯瞰できる。さらに、泥土汚れが落ち、はっきりした土器の細部や文様等の観察から、確かな時代判定が可能となる。これにより、爾後の作業進行調整が不可欠となることさえある。また、円筒印章やその印影資料あるいは銘文資料等小さいながらも情報量の大きい資料は、遺跡現場ではなく、この段階でしばしば「発見」されるものである。したがってDr Leidnerの資料観察体勢は確かに首肯し得る叙述である。

出土資料の水洗作業も単調ながら、しかし、極めて慎重を要する。なぜならば、出土地点や出土層位の異なるものが決して相混ざってはならないからである。発掘調査現場では、資料の水洗作業に調査隊員が四六時中携わることは物理的に実質不可能であり、任せられそうな者を雇い入れることとなる。これは物語中に“pot-boy”（「土器洗いの少年」、例えばp.107）として頻出する。“pot-boy”は毎日大量に出る発掘品にうまく対処して、きつと日付や出土地点、出土層位等の必要情報が記された、たとえば注記ラベル毎に峻別して、効率よく水洗作業を進めなければならない。慎重を要するだけに、適宜、調査隊員の的確な専門的指導・監督が必須となる：

■ The little boy, Abdullah, whose business it was to wash pots, was established as usual in the centre of the courtyard, and again, as usual, kept up his queer nasal chant. Dr Leidner and Mr. Emmott were going to put in some work on the pottery until Mr. Coleman returned, (p.102)

■ Abdullah was still scrubbing and still singing his depressing chant, and David Emmott was standing by him sorting the scrubbed pots, and putting the ones that were broken into boxes to await mending. (p.103)

“pot-boy”のAbdullah少年はきつと、ほかの同年齢者と較べて仕事の理解が早く、土器資料を間違いなく扱わせるに比較的信頼できると判断されたのであろう。したがって、Mr. Emmottは大切な土器資料を、もちろん監督しながら扱わせている：

■ ‘I was working with the pottery from a quarter to one till a quarter to three—overseeing the boy Abdullah, sorting it, and occasionally going up to the roof to help Dr Leidner.’ (pp.136-137)

先に想定「1928年から1938年頃」という当時の識字率を考慮すれば、あるいは「注記ラベル」の記載事項にAbdullah少年は、他の作業員とは異なり、うまく対処できたのかもしれない。筆者の1978～1979年遺跡調査時においても、遺跡近傍の村人たちの識字率はかなり低く、調査に作業員

として来ていた大人の多くが「日曜学校」に通い読み書きの基本を学んでいたし、給金受取り時のサインに換えて拇印の押捺を行なうのが普通に見受けられたほどである。したがって、Dr LeidnerがAbdullah少年を“A sharp little chap.”(p.119)と評したのは、実感のこもった発言として首肯できる表現ではある。

またMr. Emmottが出土資料の初期整理作業に携わる様子を、具体的には土器水洗、分類(“sorting”、p.137)作業として作家は描述し、さらに続けてその意味を次のようにも著している：  
■ discussing what to keep and what to fling away.”(p.137)

すなわち、隊長Dr Leidnerを手伝って、保存すべき出土資料(土器)の「取捨選択」に携わっている。これは極めて慎重かつ確な、しかもすばやい判断力の求められる作業であり、またそれをなし得るためには、当然ながら多くの資料に正しく接する経験から学んでおく必要が不可欠である。西アジアの生活址遺跡の発掘では土器資料の出土量は膨大な量になることが一般的であり、爾後の調査研究や報告書作成時の労力・効率を考慮すれば、可能な限り取扱う資料を限定することが肝要となるからである。何を残し、何を捨てるかの判断は、したがって極めて重要であり高い専門性が要求される。つまりMr. Emmottは、隊長Dr Leidnerと共に、これに関わることの出来る優れた調査研究者であることをこの物語表現は意味している。作者アガサ・クリスティが、Mr. Emmottにこそ夫君マローワンを重ねているらしいことは、その自叙伝(註6)等での描きぶりが示唆するところながら、マローワン自身この作品中の人物設定に自らを看破している旨をその自叙伝に吐露している：“In this book I figured as Emmott, a minor but decent character.”<sup>(16)</sup>

発掘調査体験初心者にとっては、決して予備知識としてあるいは興味の対象としてはそれほどでもないであろう「土器」。遺跡調査現場では捨て去らなければならないほどありふれたこの資料の考古学的重要性を、アガサ・クリスティは実際の遺跡調査体験から、恐らくマローワンの教示から真に納得したのかもしれない。先史考古学では、「土器」こそが有効に遺跡の年代判定(編年)を可能にするからである：

■ she took me through into the antika-room. There was a lot of stuff lying about—mostly broken pots it seemed to me—or else ones that were all mended and stuck together. The whole lot might have been thrown away, I thought. ‘Dear, dear,’ I said, ‘it’s a pity they’re all so broken, isn’t it? Are they really worth keeping?’ Mrs. Leidner smiled a little and she said: ‘You mustn’t let Eric hear you. Pots interest him more than anything else, and some of these are the oldest things we have—perhaps as much as seven thousand years old<sup>①</sup>.’ And she explained how some of them came from a very deep cut on the mound down towards the bottom<sup>②</sup>, and how, thousands of years ago, they had been broken and mended with bitumen, showing people prized their things just as much then as they do nowadays. (p.72、下線は引用者による)

⇒Leidner婦人による解説、すなわちDr Leidnerが「何よりも土器に最も関心を持っている」、「最古の土器が7000年前に遡る」(下線部①)や、「遺丘の深堀部最下層」云々(下線部②)は、遺跡に有って考古学者の真に基礎的な調査活動具合を間近に見聞して、はじめて他者に語り得るほどに理

解し得たことと解される。

また、別の箇所では、編年作業に不可欠な層位的発掘の様子について確かな言及がある：

■ He explained that they had already cut down through twelve levels of house occupation.

‘We are now definitely in the fourth millennium,’ he said with enthusiasm. (中略) Mr. Mercado pointed out belts of ashes (中略) and he explained how the pottery changed in character, (p.232)

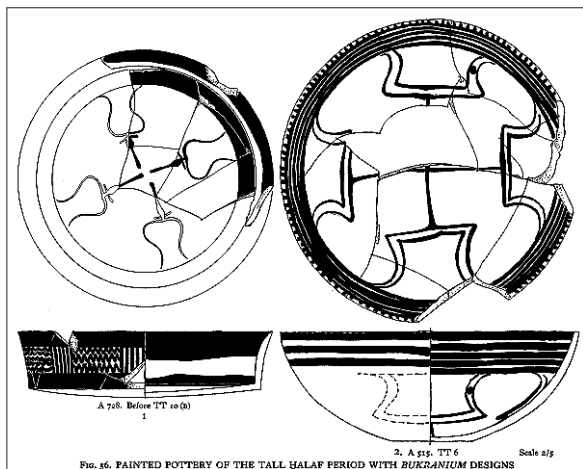


図2. (上) “pattern of bulls’ horns” の土器<sup>(17)</sup>

図3. (右) “pattern of bulls’ horns” の集成<sup>(18-2)</sup>



FIG. 26. BUKRANJA AND MOUFLON DESIGNS. T. JALAF WARE

以上のほかにも、「土器」に関わっての細かな（専門的）言及は物語中に頻出する（引用者による下線部、《》内は主要項目）：

■《土器復元》the more delicate pieces of pottery were brought there to be pieced together. (p.51)

■《土器選別》The doctor looked up with abstracted eyes, murmured, ‘Lovely, lovely,’ perfunctorily and went on sorting potsherds. (p.57)

■《土器復元》Mrs. Leidner had brought with her from the antika-room a very delicate little saucer broken in several pieces, and this she now proceeded to join together. I watched her for a minute or two and then asked if I could help. ‘Oh, yes, there are plenty more.’ She fetched quite a supply of broken pottery and we set to work. (p.74)

■《土器片洗浄、「牛頭文」(図2, 3)》Afterwards Dr Leidner and Mr. Mercado cleaned some pottery, pouring a solution of hydrochloric acid over it. One pot went a lovely plum colour and a pattern of bulls’ horns came out on another one. It was really quite magical. All the dried mud that no washing would remove sort of foamed and boiled away. (pp.74-75)

■《「牛頭文」》He was showing her a big dish with bulls’ horns on it. ‘The prehistoric levels are

being extraordinarily productive,' he said. 'It's been a good season so far. Finding that tomb right at the beginning was a real piece of luck. The only person who might complain is Father Lavigny. We've had hardly any tablets so far.' (p.76)

■《土器復元、アセトン液》One was when I went to the laboratory to fetch some acetone to get the stickiness off my fingers from mending the pottery. (p.84)

■《土器復元》Always asking my husband about the chemical processes for treating the metal objects and helping Miss Johnson to mend pottery. (p.224)

■《土器洗浄用酸》'It was a strong solution of hydrochloric acid.' 'The stuff they use on the pots?' 'Yes. (p.276)

なかでも、“pattern of bulls' horns”と表現されているものは、北部メソポタミアのハラフ期彩文土器意匠に特有な「牛頭文 (bukranium design)」(図2および図3)のことと思われる。これについては、マローワンがArpachiyah遺跡(イラク、1933年)やChagar Bazar遺跡(シリア、1935、1936年)の調査報告書で詳細に採り上げ、さらにはこの文様意匠の時期的変遷を論考<sup>(18)</sup>しているほどであり、遺跡発掘現場でアガサ・クリスティはこの特異な文様自体ばかりでなく、文様形態の考古学的意味付けについての論説を夫君より興味深く聞いたと考えられる。

### Ⅲ. おわりに：凶器に設定された「石臼」(覚え)

本稿では、『Murder in Mesopotamia』中、著者アガサ・クリスティの考古学実体験に基づく専門的描写ゆえに物語に卓越した迫真性をもたらす所以となっている箇所のうち、遺跡発掘作業場面や「土器」資料に関する記述箇所を見てきた。もちろんこれら以外にも、たとえば調査隊宿舎の「風呂」用水が「石油罐で運ばれる泥水 (muddy water brought in kerosene tins)」(p.52)であることは筆者もまた実際にイラク遺跡調査現場で体験した通りである。また、「円筒印章(シリンドラー・シール)」<sup>(19)</sup>はその資料自体の特異性から「西アジア考古学」らしさを強く印象付けるに効果的となっている：

■Miss Johnson says she was in the living-room taking impressions of cylinder seals. (p.115)

■'I was working in the living-room—taking impressions of some cylinder seals on plasticine.' (pp.142-143)

■Miss Johnson explained that tablets had been scarce and that there had been very few inscribed bricks or cylinder seals. (中略) That led the talk to cylinder seals, and presently Miss Johnson fetched from a cupboard a sheet of impressions made by rolling them out on plasticine. (p. 252)

金製出土資料についての対応、“You have to pay the workmen who find it the weight of the object in gold.” (p.73) もまた、WoolleyによるUr遺跡ほか、かつての西アジアにおける考古学調査においては茶飯事であったと伝えられているところではある。

おわりに、いまひとつの「出土考古資料」についてふれておきたい。『Murder in Mesopotamia』

は「密室殺人」の犯人捜しという典型的ミステリイ作品であり、犯行に使われた「凶器」として名探偵Poirotが想定したのは石臼：

“a heavy great quern or grinder” (p.289)、“quern” (p.334)、“stone querns and grinders” (p.338)、“a heavy quern” (p.339)、“there is a hole in this quern” (p.339)、“the quern” (p.347)。

石臼は新石器時代以降の西アジアにあっては、ムギ栽培域の粉食文化圏では必須の日用品であり、物語中にもTell Yarimjah遺跡出土資料中にその存在が著されている：

■ Dr Leidner was bending over looking at a lot of stones and broken pottery that were laid in rows. There were big things he called querns, and pestles and celts and stone axes, and more broken bits of pottery with queer patterns on them than I've ever seen all at once. (pp.56-57)

著者アガサ・クリスティが、なぜ犯行の凶器として「石臼」を選択したかについては稿を改めなければならないが、「石臼」が本来の目的外に武器として使用されることは、「聖書<sup>(20)</sup>」や「北欧神話<sup>(21)</sup>」等に見いだされることを備忘のためここに敢えて記しておきたい。なお、『Murder in Mesopotamia』では、先述の如く、夫君マローワンに重なる作中人物Mr. Emmottに著者アガサ・クリスティが次のように語らせているのは、「北欧神話」を示唆しているかのようでもある：

■ ‘There used to be a fairy story I read when I was a kid. A Northern fairy tale about the Snow Queen and Little Kay. I guess Mrs. Leidner was rather like that—always taking Little Kay for a ride.’ (p. 247)

#### 【註】

1. Dame Agatha Christie Mallowan, D.B.E., Hon.D.Litt., F.R.S.L., *Iraq*, Vol. 38, No. 1, 1976.
2. 広辞苑（第三版）所収「クリスティ【Agatha Christie】」の項より。
3. 数藤康雄「中近東のクリスティー」（アガサ・クリスティー著、高橋豊訳『メソポタミヤの殺人』[ハヤカワ文庫1976年] 所収〔解説〕）。
4. *Nimrud and its remains*, 2 vols, London : Collins, 1966.
5. ①乾信一郎訳『アガサ・クリスティー自伝（上）・（下）』（早川書房 クリスティー文庫）2004年。  
②Max Mallowan, *Mallowan's Memoirs*, London: Collins, 1977.
6. アガサ・クリスティー著、深町真理子訳『さあ、あなたの暮らしぶりを話して』（早川書房 クリスティー文庫）2004年〔原著：Agatha Christie, *Come, Tell Me How You Live*, London: Collins, 1946.〕
7. 遺跡調査隊長の妻。
8. 遺跡調査隊長。考古学者。
9. 大津忠彦、下釜和也、2014年、「イラク・クルディスタンの考古学 —課題と可能性—」、『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第25号所収「図1」右側。
10. 大津忠彦、1999年、「古代メソポタミアの洪水伝説」、『季刊 河川レビュー』、新公論社、第28巻第3号、66～74頁。
11. William Coleman: 遺跡調査隊員
12. Father Lavigny（文字資料解説担当の調査隊員）とHercule Poirot（私立探偵）との会話
13. William Coleman（前出）とAmy Leatheran（Mrs Leidnerの付添看護師）との会話
14. 考古学研究者が、真正の考古学的発掘調査によって採集した考古資料
15. Leonard Woolley, *Digging Up the Past*（A Penguin Book 1954年版）所収Plate 3の「The basket-men

at work. A long climb to the wagons, Ur」は、この情景と重なる。

16. 註5、②の第13章 Agatha's Books (208頁) より
17. M. E. L. Mallowan and J. Cruikshank Rose, 1935, Excavations at Tall Arpachiyah, 1933, *Iraq*, Vol. 2, No. 1 所収Fig. 56
18. ①註17所収: Chapter II The Bukranium Design: Evolution of Design of the Tall Halaf Ware: Al 'Ubaid and Samarra Ware Compared with Tall Halaf: General Considerations of Style (pp.154-163)  
②M. E. L. Mallowan, 1936, The Excavations at Tall Chagar Bazar, and an Archaeological Survey of the Habur Region, 1934-5, *Iraq*, Vol. 3, No. 1 所収Fig. 26. Bukrania and Mouflon Designs. T. Halaf Wareの解説: "With these sherds compare Arp., figs. 73-6, illustrating the evolution of the bukranium design," (以下省略p.47)
19. 『Murder in Mesopotamia』(初出1936年)が最初に邦訳された1970年代には、「円筒印章(シリンダー・シール)」という西アジア考古資料は日本において未だ一般的に知られていなかったらしく、誤訳が見られる。参照: 大津 忠彦「西アジア考古資料と近代日本文学: 円筒印章(シリンダー・シール)の小説への登場形態」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』、第6号、115~127頁、2011年。
20. ①土師記/09章 53節: 一人の女がアビメレクの頭を目がけて、挽き臼の上石を放ち、頭蓋骨を砕いた。(新共同訳)  
②サムエル記下/11章 21節: 昔、エルベシエトの子アビメレクを討ち取ったのは誰だったか。あの男がテベツで死んだのは、女が城壁の上から石臼を投げつけたからではないか。なぜそんなに城壁に接近したのだ」と言われたなら、『王の僕へト人ウリヤも死にました』と言うがよい。(新共同訳)
21. ①グレンベック (Vilhelm Grønbech) 著、山室静訳『北欧神話と伝説』(新潮社、1971年) 所収「スツツングの蜜酒」: 「フヤラールは家の中には行って行くと、彼女にきいた—あなたの夫が沈んだ場所を見たら、少しは悲しみがしずまりはしないかと。それは大きな慰めになりますと言って、彼女は戸口へ海上を見に出てきた。ところが、彼女が外へ出てきた途端に、石臼をもって屋根に上っていたガラルが、女の頭の上にその臼を落した。彼女は臼におしつぶされて死んだ。」(80頁)  
②金田鬼一訳『改訳 グリム童話集』(第二冊)(岩波書店、1970年「第19刷」) 所収「百櫃の話」: 「「だめ、だめっ」と言って、おかあさんがはね起きました、おかあさんの髪かみの毛は、炎ほのおのように逆だちました、「まるで、世界が沈むようだよ、あたしも、外へでてみる、氣もちがよくなるかしら」ところが、おかあさんが戸ぐちからでたとたん、どたーん! と、おかあさんのあたまをめがけて、鳥が例いしうすの石臼をなげおとしたので、おかあさんは、たたきつぶされてしまいました。」

(おおつ ただひこ: アジア文化学科 教授)

